

治安維持法犠牲者を描く津田青楓の絵画

[治安維持法同盟神奈川県本部湘北支部『不屈 湘北版』 2014年2月号原稿]

下山房雄（海老名市国分南）

東京・竹橋の近代美術館所蔵作品展（MOMAT コレクション）で、1933年2月の小林多喜



二虐殺に触発されて描かれた津田清楓（1880-1978）の「犠牲者」が展示されている（4月6日まで、65歳以上無料）ことを東京新聞で知って観に行った。上京交通費節約の私の流儀で、夜・赤坂サントリーホールでの日本フィル定期コンサート（井上道義指揮でショスタコーヴィッチとサンサーンス）、昼・新宿シネマカリテで映画「アンナ・ハーレント」鑑賞の間の営為であった。私の身边でも話題評判になっていた映画には、理性的にも感性的にもそれほどの魅力を感じなかったのだが、津田の2枚の絵画（ブルジョワ議会と民衆の生活 犠牲者）の私へのアピール力は大きかった。山梨に、青楓の作品約500点を所蔵する笛吹市立青楓美術館があると知って、訪ねようと思ったりしている所以である。

津田清楓のことは、河上肇自叙伝に登場するので名前を知っている程度の私の認識であっ

た。ネット百科事典の該当項目の紹介を引用すれば次のごとくであるー「（前略）友人河上肇の影響でプロレタリア運動に加わり、1931年、第18回二科展に、立派に聳え立つ国会議事堂と粗末な庶民の家屋群を対比させた「ブルジョワ議会と民衆の生活」を出品したが警察当局の圧力により「新議会」と改題させられた。1933年、小林多喜二への虐殺を主題に油絵「犠牲者」を描いていたところを警察に検挙され、留置を受け、処分保留で釈放される。のち転向して二科会から脱退し、洋画から日本画に転じる。親友に夏目漱石がおり、漱石に油絵を教えた他、漱石の『虞美人草』『道草』や森田草平の『十字街』などの装丁を手がけた。」

美術館展示の「犠牲者」に付けられた説明から抜いての紹介もしておくー「津田は、「十字架のキリスト像にも匹敵するようなものになりたいという希望を持って、この作にとりかかった」（『老画家の一生』）と記しています。拷問をうけ吊り下げられた男と、左下の窓を通して取り込まれた建設中の国会議事堂が対比されます。プロレタリア芸術運動への弾圧が激しさを増す中、

津田自身も家宅捜査の後、一時拘留されました。《ブルジョア議会と民衆生活》は押収されましたが、幸いこの作品は隠し通すことができました。」

そんな次第で展示されている「ブルジョア議会と民衆生活」は下絵のようだ。この絵の上部の鳥のように見えるのは何だろう。「犠牲者」にみる特高拷問のさまは、おそらく津田が多喜二の小説「1928年3月15日」を読んだイメージで描かれたものだろう。今日、江口渙の文章などでありありと読める拷問の実相は、虐殺直後には未だ知られていなかったから—

因みに1928年3.15事件で逮捕された人々の『獄中18年』（徳田球一・志賀義雄著、1947年刊）は、多くの忠君愛国優等生の少年を左翼青年に変革したことがらであった。左翼老年の私もそういう変革を経て今日まで生きてきた。

(2014年2月3日 甲午如月節分)

